

## 古代の寺や吉野山中で亡き人を偲ぶ人

田中作子第五詩集『吉野夕景』に寄せて

鈴木比佐雄

### 1

田中作子さんとは、一九九〇年代の初めに詩学社の嵯峨信之さんの呼びかけで、何度か一緒に吉野の花見に行ったことがある。「東京詩学」の池下和彦さんから数十人と関西の詩誌「アリゼ」の以倉紘平さんから数十人が吉野の寺院に一泊して詩を語りあった。翌日は下千本、中千本、上千本の桜を眺めながら、奥深い西行庵まで山歩きを楽しんだ。田中作子さんとも声を掛け合って山道を歩いたことを昨日のように思い出す。田中さんは嵯峨信之さんを誰よりも敬愛していることが、言葉の端々から伝わってくる。嵯峨信之さんは当時九十歳に手が届きそうな高齢だったが、東大脇の本郷

から根津に下りる坂道を足早に歩いていたらほど健康だった。また桜狂いといえるほど嵯峨さんは桜を愛していた。そんな嵯峨さんの山桜への想いの強さが多くの詩人たちに感染して、年に一度の吉野の花見が行われたのだった。その時の思い出は、私の中にこの世の最も心が洗われる時間として刻まれている。田中さんの新詩集『吉野夕景』は、その山桜の花見に寄せた詩篇が冒頭に置かれている。その新詩集に触れる前に田中さんのこれまでの詩集について紹介してみたい。第一詩集『二枚の布』は一九八七年に刊行された。その中に「ゆうぐれ」という詩がある。

ゆうぐれ

むかしの空の

ゆうぐれは

空にうかんだ  
グランドピアノ

夕映えの空

黒い屋根

楽譜にまがう

電線に

風がピアノを

弾いて行く

今ゆうぐれの

影をふみ

わずかに残る旋律を

聴きながらゆく

帰り道

田中さんは子供の頃に夕焼けを見ると荘厳な

「グランドピアノ」の音色を聞いていたのだろう。名残惜しい一日の終わりは、映画のラストシーンのように少し物悲しい音色を掻き鳴らし、子供の心にこの世で生きることがゆうぐれの舞台上立つように感じられたに違いない。一連を読めば子供頃から田中さんはゆうぐれの風景に音を感じる共感覚の持ち主であったことが分かる。二連には、「グランドピアノ」の弾き手が実は風であり、風が電線をたゆませて不思議な曲を奏でていることを告げている。そして三連には、そのゆうぐれの旋律を今でも自分の影を踏んで家路に着く時に聴き取ることが出来ると語っている。その意味で田中さんは、一日一日を精一杯生きながら、一日という時間の命を慈しんでいるゆうぐれの詩人なのだろう。現代人は、ゆうぐれの本当の魅力をいつのまにか忘却してしまっているのであり、その忘却していたゆうぐれの言い知れぬ感動を田中さん

この詩は取り戻してくれる。何かゆうぐれの懐かしいメロデーを聞いて生きる力を取り戻させてくれる詩篇だと私は感じたのだ。田中さんは過去の時間を過去の思い出に閉じ込めないで今に生かし、さらに未来に投げかけるような重層的な時間感覚を生きているように思われる。そうだからこそこの「ゆうぐれ」のような詩が生まれたのだろう。

## 2

第二詩集『形のまま』には、一九九四年に刊行されたが、その中に「ゆうべ」という詩がある。この詩にも一日の時間をどのように生きるかという問いが秘められている。

## ゆうべ

窓に夕ぐれを見ても  
街路灯がともるので  
夜は明るくなるばかり

一日がこまぎれになる  
こまぎれを糸に通す

幼い日の  
ガラスの丸いビーズ玉  
丸いのや ひらたいの  
色とりどりの

透明なもの 不透明なもの  
手もとに寄せてつまみあげる

かるがると過ぎてゆく  
時の貧しさを糸に通す

アールヌーボーのガラス工芸のような  
なつかしい色はどこにあるのだろう

あかりに透かし糸に通す  
私の夢のビーズ玉  
手もとに寄せてさがしている

詩「ゆうべ」も前に触れた詩「ゆうぐれ」と同様に一日の終わりになると、人が本来的なものに立ち返っていくような思いを記そうとしている。一連の「一日がこまぎれになる／こまぎれを糸に通す」二行こそは、田中さんの詩の特長である、時間を生きることの意味が身近な喩えで手触りのある形で示されている。田中さんのご主人は事業をされていたことをお聞きしているので、田中さんも手助けをされていてきつと忙しい生活をしていただろう。田中さんには、きつと残され

た時間が少なく詩や工芸や芸術鑑賞など、自分の美意識を磨いていく時間を持たないことに虚しさを感じていたのだろう。しかし必ず「ゆうべ」になると細切れの時間の中にも、美しいものを発見することは可能だと気付くのだ。「かるがると過ぎてゆく／時の貧しさを糸に通す」とは、時間が過ぎ去っていくけれども、その時間をつなぎとめることが出来ないだろうか、という問いを発している。「時の貧しさ」を「ゆうべ」に痛感するからこそ、その「時の貧しさを糸に通す」ことは出来ないだろうかと田中さんは熱烈に願うのだ。この詩「ゆうべ」はその意味で田中さんの詩論でありながら、生きる哲学のようなものを語っていると考えられる。詩とは田中さんにとって「私の夢のビーズ玉」であり、そこには数多の美しい時間が結晶し宿っているのだろう。

第三詩集『奈良の寺』は一九九七年に刊行されて、奈良の十五の寺を詩と写真から成り立っている。その中でも詩「秋篠寺」が特に心に刻まれる。

### 秋篠寺

技芸天はお顔を少しかしげ  
 しかかなお姿で立つて居られた  
 腰に結ばれた紐は  
 長い裳裾をたくしあげ  
 かたちのよいお腰の線は生身の女性のようであ  
 でやかである

明り取りの小窓から射し込むうすい光線と  
 お前にゆらく蠟燭が  
 後の壁に影を与え

しなやかなお指と後姿が絵のように

浮かびあがる

いつまでも離れ難い

御本尊薬師如来 日光 月光両菩薩

梵天 地藏菩薩など

御身に幾たびの災禍を受けられたのだろう

無常も常の人と変りない

修羅の現世を今ここに居られる

ひととき本堂の沈んだ空気の中にいる

私はこの世の旅人 やがて去る

広く白いお庭

こんもりと葉を茂らせた菩提樹が

鈴のような青い実をつけていた

田中さんの奈良の寺巡りは、きつと亡き人たち

### 4

への巡礼の旅だったのだろうか、それには触れずに、寺と境内全体の佇まいの中に、仏の命のようなものを感じる旅だったのではないか。技芸天は、伎芸天とも記されるが、東洋のミュージズとも称される優しい顔をした天女像だ。八世紀に作られたが、十三世紀に身体が消失し、今の身体は後世に作られたという。技芸に通じた天女像なので流麗な姿をして多くの人びとを魅了してきた。田中さんは特にこの技天像がある秋篠寺の寺院に憧れを持っているのだろう。その場所に永遠を感じて、「私はこの世の旅人 やがて去る」という人間の宿命を淡々と語るところにとっても感銘を受ける。一人で古代の寺の時間をさかのぼり、修羅の時間を潜り抜けてきた仏像や天女像と対峙する時間を田中さんは、大切に生きてこられたのだろう。その修羅と永遠の時間を受け止めた成果がこの詩集『奈良の寺』だった。

### 告別

あなたの血液から酸素が消えていく  
 温みのなくなっていく手を握りしめ 私は  
 この刻と抑えようもなく  
 まっ白い闇の中にいた

昨夜おおぜいの白衣の童子が

あなたのベッドの下に入り

ベッドを運びはじめた

ゆるゆると けぶるような薄明り中を

遠ざかって行く

追いかけてようもない

透明な壁は私の前に立ちふさがり

身動きも出来なかった

とおくとおく くゆりゆく

とおざかる

見えない山河

果てしなくつづく星座の中

さようなら

あなたはもう帰って来ない

帰って来ない

この「告別」という詩を読むと、田中さんほとてもリアリストであり、死が血液から酸素が無く

なることであることを冷静に記している。最愛の人であり半世紀もの人生の同士であった夫の旅立ちを、最後まで魂は寄り添いながらも、見送らなければならぬ残された者の宿命を記している。

寄り添った夫婦の一体になった魂が引きちぎられていくような痛みを私は感じた。激情を抑えて淡々と記すことによって田中さんの別れの想いがより伝わってきていると感じられた。

田中さんの生まれは茨城県の潮来だったが、江戸川区葛西の老家である田中家に嫁ぎ、父となった田中源は政治家であり実業家でありながら戦前から地域住民の福祉や環境のことを考えて私財をなげうって、地域ために尽力した人物であった。田中さんの家の近くに一万坪の行船公園があるが、この公園の敷地は田中源が昭和八年に寄付したものだ。田中さんの家で詩集の打ち合わせのために出かけた時に、三十分ほど早かったので、行船公

園を散歩した。入口の左手には田中源の銅像が立っている。多様な樹木の並木を抜けるとジャンボスライダーという山のような滑り台があり、また子供が水遊びできる大きな噴水もあり、たくさん若い母と子がキャーキャーといいながら遊んでいる憩いの場になっている。きつと一年中、小さな子供たちの笑い声や歓声は絶えることなく、この場所は子供たちを逞しく育ててきたことが分かった。奥には自然動物公園も無料で解放されていて、ペンギン、サル、オタリアなど多数の動物がおり、ヤギや羊やウサギなどとの「ふれあいコーナー」などもあった。月見台のある数奇屋作りの日本庭園の源心庵もあり、区の公式行事で海外からの来賓者達のために国際交流にも活用されているそうだ。またしだれ桜を初めとする多様な樹木も植えられていて、シルバー人材たちが植栽の手入れをしていたし釣堀などもあった。そんな

自然テーマパークのようなスケールに私は驚かされた。戦後になって父の土地は農地解放で多くは無くなってしまったそうだが、残された土地で養鶏場を始め、後にガソリンスタンドなどを経営して戦後の激動期を乗り切っていたそうだ。夫も政治家にはならなかったが、江戸川区の地域のために尽くされたそうだ。そんな苦業を共にした夫の手を握りながら、夫の魂が地上から離れていくのを田中さんは書き残したのだった。田中さんは行船公園の傍らに暮らし、父や夫の魂と共に日々を生きておられるのだろう。

## 5

新詩集『吉野夕景』は二十五篇の詩篇から成り立っている。一章「吉野夕景」の十四篇は吉野の詩三篇の他に、季節感のある植物に因んだ詩篇や亡き夫を偲んだ詩篇が収録されている。二章「小

さな窓」には十一篇の詩が収録されて、田中さんの暮らしを「小さな窓」からの視線で眺めながら、その視線がいつのまにか詩的なものに転化されていき、社会や世界を切り取る詩篇になっている。一章の冒頭の「吉野夕景」には、一目千本といわれるシロヤマザクラを眺めてその山桜の霊にひたつていく。すると古代の皇子や天皇や武者たちの存在を想起してしまう田中さんの意識の流れが記されている。山桜と夕暮れが田中さんの深層を刺激して古代の人物たちを呼び寄せるのだろう。詩「吉野旅情」には、嵯峨信之さんや詩の仲間と共に過ごした吉野での花見について回想し、多くの詩人たちと山桜を愛で、西行庵までいき亡き人たちを偲んでいる。また詩「梓弓」では、如意輪堂に眠る楠正成のことを偲ぶと、なぜか戦争の特攻兵士のことが深層でつながってしまう不可思議さを記している。最後に詩「梓弓」を引用して

この小論を終えたい。吉野の桜、古代の寺院に心惹かれる方、また、愛する人を鎮魂しながら生きておられる多くの人びとにも読んで欲しいと願っている。

#### 梓弓

桜並木の道を歩き

少し疲れたころ

美しい樹木に囲まれた如意輪寺に着いた

後醍醐天皇の勅願寺で近くに天皇の御陵がある

御陵は都のある北を向いている

よほどの怨念があつてのことと伝えられる

朝廷と足利幕府と諸国武士

うず巻く南北朝の歴史はよくわからない

#### 「歌書よりも軍書にかなし吉野山」

如意輪寺の宝物殿には

後醍醐天皇ゆかりの品

楠木正成の帯刀や兜などがある

二十三才の楠正行が死を覚悟で臨む

四條畷の戦い

辞世の歌と弟正時 一族郎党一四三人の名を

如意輪堂の板壁に矢尻で書いたという

宝物殿にあるその扉は是非見たかった

かえらじとかねておもへば梓弓

なき数に入る名をぞとどむる

髪を切り如意輪寺の佛前に供え祈念した正行

父の遺訓と朝敵を討つ大義名分を守ったか  
決死の覚悟で一家一族と若さを犠牲にした  
胸に迫る哀しみ

私は第二次世界大戦の特攻の人達を思った

四條畷の夕陽があかあかと

天に燃えていた。

田中作子詩集『吉野夕景』葉解説文  
鈴木比佐雄

コールサック社  
2011